ゼニガタアザラシ　シンポジウム

和田　一雄

一九八五年七月十日から三日間札幌の北方圏センター国際会議場で開かれたゼニガタアザラシのミニシンポは七月八日から五日間開かれた写真展、七月十三日の講演会を含めて一連の行事と共に無事終了した。シンポを中心にしてその印象を語ることにしたい。

ゼニガタアザラシの保護のため、十年以上も前にわれわれは一つの目標として天然記念物指定をうち出したのだが、実現にいたらず、継続的な運動を強いられた。当初は研究者集団だけでやっていたが、少しづつ運動の集団が市民運動ともつながりをもち始めた。それが、われわれの活動を長つづきさせた原因であろうと思う。

それともう一つの特長はわれわれの活動の中心が特に北海道に限定されていないことである。当初アザラシの保護をうったえた研究者三人はいづれも本州に根擔をもつ人々であった。それをうけついだ人達は特定の大学に限らず、また各研究者達はその専門を鰭脚類に限らず、二足や三足のワラジをはきつづけたことであった。これは弱点にもなるが、又多様性を維持し、たえず問題を複眼的にとらえる視点を用意したことでは長所にもなったと思われる。

今回のシンポのねらいは長年やって来たわれわれの成果を系統的にまとめ、見通しをつけることであった。仲間にはいろんな分野の人達がいるので、見通しは立てやすかった。

つぎの欲張ったねらいは漁業関係者の出席であった。地域によっては事前に会合をもったりして話し合いが行なわれたが、歯舞、落石漁協管内の漁協及びサケ定置関係者が出席し、活発に議論に参加してくれたことは成功だった。

どうせやるなら外国の、調査・研究・保護の面で進んだ経験をもつ研究者を招待しようということだった。この点でもイギリス・アメリカから三人の第一線級の研究者の参加が実現した。

シンポジウム第一日はゼニガタアザラシの生物等に焦点がしぼられた。新妻昭夫氏の個体識別を用いた社会、生態は高く評価された。体表の斑紋を用いた個体識別法は鰭脚類では例がなく、長期観察によって出生・死亡・個体間関係に言及された。繁殖期には成獣雌と一～二頭の成獣雄が岩礁を利用し、交尾する。雌は繁殖期のみ毎年同じ岩礁に姿を現わし、あとはどこにいるのか不明のままである。雄は一年中特定岩礁を休息場所として利用しているが、繁殖期には一～二頭の成獣を除き、岩礁から姿を消してしまう。この期間に成獣雄の頚の周囲に傷が多いので、雌の獲得をめぐるたたかいがあると思われる。ゼニガタアザラシはハーレムを作らないと演者はのべている。この点をめぐって論議が展開された。オットセイのように陸上にテリトリーを作らないが、海中に作っているかもしれない。そうだとするとあまり大きな空間を守れないから大きなものにはならないだろう、等の論議がかわされた。

羽山伸一氏のゼニガタアザラシの回遊様式に関する仮説は新妻氏の観察を支持しつつ、提出された。根室半島の周辺の秋サケ定置網にひっかかり、溺死する同アザラシの回遊群は性、年齢構成から、前期、後期に区別出来た。前期にはアカンボ、未成熟個体（一

～二歳)、亜成獣(三～五歳)がノサップ岬周辺で羅網した。後期には根室半島全域で羅網し、ノサップ岬での羅網は相対的に減少した。この時期には雌成獣(六～一〇歳)と老獣(一一歳以上)が出現したが、雄成獣は現われなかった。この観察は新妻氏が行なった繁殖場での出現傾向を支持した。雌は繁殖期以外は短いが回遊し、雄は年中繁殖場周辺にたむろすることをうかがわせた。

回遊様式については山中正実氏がトドについて言及した。回遊様式に関する仮説の提出は日本の研究者が特に興味をもつ一面で、外国ではあまり注目されていない。この面でさらに独創的研究を展開したいと考えた。

宇野裕之氏は頭骨の形態変異を、発育に伴う過程においてどのように出現するかという点でとりあげ、鈴木正嗣氏らは生殖器の形態的、組織的検索からゼニガタアザラシの性的二型の存在に言及した。

これらすべての演題で共通して論及されたのは性的二型をめぐってであった。ルボフ氏はこの論議の中で回遊の規模は体の大きさと密接に関係するとのべたことは注目された。これらの論議は機会あるごとに検討されることになろう。

シンポジウム第二日は午前中サケ定置をめぐる被害に関してであった。和田は根室半島周辺、とに歯舞漁協管内の被害の実態を報告した。定置網で溺死するアザラシの七十二%はゼニガタアザラシであった。アザラシの溺死個体はノサップ岬周辺に著しく集中し、被害として問題になるのはそのうちのいくつかの定置のみであった。このことからはソ連領からの個体であると推定された。歯舞漁協第二七号定置での被害は定置網で発見されるサケ頭部、死亡サケ、市場で発見される傷サケとして認められた。それらは中網、岸網に集中し、沖網ではごくわづかであった。このことは岩礁性の魚を主としてたべているという中岡氏らの食性の研究とも合致した。サケ食害数は第二七号では総水揚げ尾数に対して多いときで三・八%であった。

新妻昭夫氏は大黒島での被害についてのべた。すぐ近くにゼニガタアザラシの繁殖場があるのにもかかわらず、一九八四年の春サケ漁期に一定置で溺死したアザラシ十四頭のうち二頭のみがゼニガタアザラシの初生児であった。ここでは傷サケが被害の主体で総水揚げ尾数に対して二～三%程度であった。繁殖場のゼニガタアザラシは定置網の構造をよく学習しているので箱網まで入りこんで溺死することがないのかもしれない。ノサップ岬の場合とはちがって興味ある現象である。

エリモ岬周辺でも限られたサケ定置に被害があり、高いものでは総水揚げ尾数に対して五・五%であった。

これらの被害について増田洋氏は水産経済の面から評価を行った。各定置網でノルマが達成されるような場合はあまり大きな被害としては考えられないが、ノルマが達成されない場合は被害換算金額が利益配当にある程度はねかえる。これが何らかの方法で吸収出来るとすれば、保護とサケ定置漁業との共存が可能であろうとのことであった。

第二日目の午後はバーンズ、ルボフ、ボナー各氏の話題提供に費された。興味深い生物学、保護行政等多岐に渡る熱っぽい論議が行なわれた。

バーンズ氏はソ連研究者との共同研究によりゼニガタアザラシの地理的変異を生態的、形態的にのべ、太平洋西岸の個体は体が大きいことを指摘した。そして、陸上繁殖型と氷上繁殖型のアザラシ間で雑種がブリストル湾に分布することを指摘した。

ルボフ氏は絶滅に頻したキタゾウアザラシの回復過程をのべ、個体識別をしつつ、生涯繁殖成功度を明らかにした。それは雄については何頭の雌と交尾したか、又雌については正常に離乳した仔の数に基づいて算出された。雄の繁殖成功度は一つには大きな体により得た社会的に高い地位の獲得で左右される。ここでも一夫多妻制と性的二型の問題が第一日目にひきつづき論議された。

ボナー氏はイギリスにおけるハイイロアザラシの生物学に触れ、その保護・管理の実状を紹介された。特に興味深かったのはサケ定置における網の改良であった。定置網の入口にサケには影響を与えず、アザラシの入網をさえぎる構造上の工夫であった。又、アメリカとも共同して低周波の音波壁を作り、同様の効果をあげる技術開発が現在進行中である。いづれも日本で早急にとりくむべき技術であると思われた。

最終日は保護に関する見通しに問題がしぼられた。鈴木正嗣氏がこれまでの保護運動の歴史の問題点を整理した。

増田洋氏は水産資源を長期的に維持し、アザラシと共存する可能性を示唆したが、その背景には地域住民の幅広い理解が必要であることを強調された。

米田政明氏は鰭脚類をめぐる法体系が整備されていない現状で天然記念物指定は現実的に有効な方法であることを示し、哺乳類その他の動物を含む希少種保護法令の制度化

を提案した。

吉池律雄氏はゼニガタアザラシの保護にさいして起る被害を生物的、行政的、水産経済的、情緒的側面から検討した。この回には被害をめぐり「環境抵抗」「規制抵抗」の二つの概念を提案して、これらをさらに論理的に整理した。そして水産行政の面から被害をサケ定置漁業の中で吸収する案を提出した。

このようにゼニガタアザラシの保護に関して起る諸問題を経済・法律・行政の面から整理し、それをうけて棚橋恵子氏は保護・管理に関して具体的提案を行なった。この中で重要な点はつぎの通りである。保護・管理について研究者・漁業関係者・行政で構成する委員会があたる。ゼニガタアザラシの個体数水準について具体的対応を行ない、被害問題についてはすでにのべた技術開発、水産行政上の解決策等多面的対応を行なう。

これらの講演・論議をうけてゼニガタアザラシの保護・管理に関する札幌アピールが漁業関係者も含めた出席者全員の合意により採択された。その中で確認された二点はつぎの通りであった。(1)ゼニガタアザラシは世界的にみて希少動物であり、また日本沿岸で繁殖する唯一の鰭脚類である。ゼニガタアザラシの絶滅はさけなければならず、適正な保護・管理が行なわれなければならない。(2)ゼニガタアザラシの生息地周辺の漁業に対する被害が存在すること、またその実態が明らかになった。今後、防除等の対策が必要である。

これはわれわれの運動の上で画期的出来事であった。

われわれは今回の成果をふまえ、調査・研究・保護・管理等についてさらに前進しなければならない。終りにあたり今回のシンポジウムを成功に導くために指導・援助をいただいた北海道自然保護協会を始め多くの団体・個人の方々に深くお礼申し上げる。

《プログラム》

ゼニガタアザラシの生態と保護に関するシンポジウム

七月一〇日(水)　9：00～17：30

開会の辞　三島　清吉（北大水産）

後援団体よりの挨拶　日本生命財団

Ⅰ　ゼニガタアザラシ保護運動の目標と現状　和田　一雄（京大霊長研）

Ⅱ　ゼニガタアザラシの生物学

1　日本産鰭脚類の生息の現状　伊藤　徹魯（朝日大）

2　ゼニガタアザラシの生息数―一一年間のセンサス調査のまとめ　宿野部　猛（帯畜大）・伊藤　徹魯

3　ゼニガタアザラシの社会生態　新妻　昭夫（京大理）

4　ゼニガタアザラシおよびゴマフアザラシの食性の比較　中岡　利泰（帯畜大）・浜中　恒寧（海獣談話会）

5　北海道東部沿岸で捕獲されたアザラシの有機塩素化合物および重金属類の蓄積特性　立川　涼・河野　公栄・田辺　信介・本田　克久（愛媛大）

6　北海道根室半島におけるゼニガタアザラシ回遊群の年齢構成と回遊様式　羽山　伸一（海獣談話会）・宇野　裕之（北大農）・和田　一雄

7　ゼニガタアザラシおよびゴマフアザラシの頭骨の生長・発育様式の比較　宇野　裕之

8　ゼニガタアザラシの性成熟と発育段階区令　鈴木　正嗣・山下　忠幸（帯畜大）

9　ゼニガタアザラシの集団遺伝学　藤尾　芳久・斉藤　祐子（東北大農）

10　ゼニガタアザラシの発生変異と性的二形について　羽山　伸一

11　ゼニガタアザラシの迷子パップ（新生児）の飼育と自然復帰の条件　住吉　尚・渡辺　徳介（釧路動物園）

七月一一日(木)　9：00～17：30

Ⅲ　沿岸漁業と鰭脚類の関係

1　サケ定置網におけるアザラシ被害の実態

イ　ノサップ岬を例に　和田　一雄・羽山　伸一・中岡　利泰・宇野　裕之

ロ　厚岸大黒島を例に　新妻　昭夫

ハ　エリモ岬を例に　棚橋　恵子（帯畜大）

2　サケ定置網におけるアザラシ被害の経営経済的評価　増田　洋（北大水産）

3　北海道沿岸海域におけるトドの回遊と漁業被害について　山中　正実（北大水産）

Ⅳ　海外招待研究者の講演

1　キタゾウアザラシの生涯繁殖成功度　W・N・ルボフ（カリフォルニア大学）

2　アリューシャン列島沿岸の Phoca vitulina について　J・J・バーンズ（アラスカ漁業・狩猟局）

3　イギリスにおけるハイイロアザラシと漁業との関係　W・N・ボナー（イギリス南極研究所）

W・N・ハーウッド（イギリス海産哺乳類研究所）

七月一二日(金)　9：50～17：30

Ⅴ　漁業と海産哺乳類の共存―ゼニガタアザラシ保護の経済的・行政的・法的・社会的諸条件について―

（座長　羽山　信一・長田　英己（帯畜大））

1　ゼニガタアザラシ保護運動一一年の経過と問題点　鈴木　正嗣

2　水産経済の立場からみたアザラシ保護の問題　増田　洋

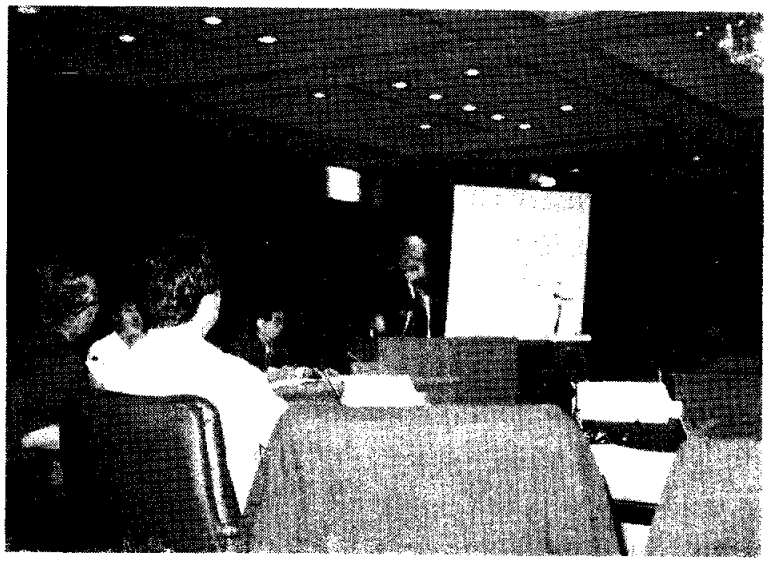
3　鳥獣保護行政・天然記念物行政とゼニガタアザラシ保護問題　米田　政明（野生研）

4　海産哺乳類保護における法的・行政的方策　吉池　律雄（海獣談話会）

閉会の辞　八木　健三（北海道自然保護協会会長）

ゼニガタアザラシ
シンポジウム

Sapporo Symposium
on Kuril Seals



シンポジウムで講演中のルドフ教授

岩礁で休む
ゼニガタアザラシ

泳ぐ姿
ゼニガタアザラシ